

# 本を選ぶ

## 高校図書館版

NO.17 1994年(平成6年)5月10日

●発行/ライブラリー・アド・サービス

本社 千162 東京都新宿区下宮比町2-28 飯田橋ハイタウン517 TEL.03-3235-6168

### ぶっく・えんど

#### 読書なんかしなくていい

出版業界のある新年会で、某社の経営幹部が「喜ばしいニュース」として、某高校での読書指導の成功をスピーチのネタにしていた。朝の何分間かを全校で読書タイムとしたのがおおいに成果を上げたという一般紙その他でもさかんに紹介された話題である。この「快挙」にケチをつけるつもりは毛頭ないが、「ああ、またか」とやりきれない気分になった。

子供や若者の“活字離れ”あるいは“読書離れ”はあいかわらず蔓延しつづけており、“出版文化”の将来にとってますます深刻な危機要因となっている。筆者が嫌気をもよおしたのは、こうしたわが業界のお約束の文脈に、某高校の試みがまたしても「待ってました」とばかりに引きずり込まれてしまったからである。

このお馴染みの“活字離れの物語”は、筆者がこの業界に入った15年前にはすでに“定説”であったし、さらにその10年前の中学生時代にも教師から「近頃の中学生は本を読まなくなった」とさんざ聞かされていた。なぜか読書はいつでもどこでも“善”であった。にもかかわらず、“最も本に親しむべき”子供や若者はいつでもどこでも本を読まず、大人はそれを嘆きつづけてきたのである。

本で飯を食う人々にとっては、本は商売の種として必要なものであるわけだが、そういった利害を抜きにして、なぜ皆が読書すべきなのかを示す絶対的な根拠があるのだろうか。たしかに個々の体験談を積み重ねれば、ムードとしての「読書の

大切さ」をアピールすることはできるかもしれない。しかし、地球上には読み書きができなくても、あるいは無文字社会にあっても、彼らなりの“文化的な”生活を営む人々が大量にいることを思えば、「読書の大切さ」など所詮は読み書きできる側の人間による自画自賛の風景を越えるものではないだろう。

だったら、話を損得のレベルに戻してしまった方がわかりやすい。読み書きできる人々や文化が、読み書きできない人々や文化を支配し、差別してきたのがこの社会の現実である。地球上の全人口54億人のうち、文字が読めない約10億人の人々は、そのことによって不利な立場に置かれてつづけている。こうした構造がある限り、読み書きする側への移動が貧困からの脱出の第一歩であることは揺るがない。日本の近代化を支えてきた“教育熱”も、つまりはこれだったし、みんなが読み書きできるようになればなったで、学歴のランキングがモノをいう。それが“教育”の実態である。

読書すべきなのは自明であり、学校や図書館が必要なのも自明とされている。しかし、本も学校も図書館も、われわれが現実世界で相対的な有利さを得るための役割を果たしてきたということ以外に、それらの絶対的な必要性を証明しうる切り札があるのだろうか。

本も学校も図書館も、本当はなくなってもかまわない。読書なんかしなくていい。本や学校や図書館にまわりついている手垢にまみれた“善”のストーリーから大人も子供も解放されるためには、少なくとも思考実験として、すべてゼロ査定してみるしか方法がないように思われる。

(川島 勉：思文閣出版)

## 人と人を結ぶ図書館—保善高校の場合

東京都新宿区にある私立保善高校図書館では、1992年から年に二回図書館講座を開いています。1993年度の図書館講座を見学しました。

プログラムは、次の通りです。

### ■1993年6月

演題：山を歩く

講師：人見邦明先生（英語科・登山部顧問）  
戸嶋直彦先生（国語科・登山部顧問）

### ■1993年12月

演題：各駅停車—新宿界隈を歩く—

講師：樋山信行先生（国語科・文学散歩）

どちらも定期試験が終わった日の午後に開かれました。

試験が違って解放された生徒がどやどやと図書館へやってきます。100タイトル近い雑誌のコーナーは、棚に残っている雑誌が少ないほど生徒が群れています。カウンターでは司書の坂口とし子さんが自分よりも背の高い男子学生に囲まれて、リクエストに応えたり、本のありかを教えたり、ひとりひとりの問いかげにこたえたりと、部屋は活気に溢れています。ひとしきり騒ぎが収ると、図書館講座の始まりです。

保善高校の図書館は一階が貸出、二階が参考図書とスタッフルームになっていて、講座は参考図書室で開かれました。8ミリ撮影の図書委員がスタンバイしています。部屋の中央には登山部のテントが張られています。ブックトラックには関連の図書が集められています。先生方も参加しています。図書委員会委員長の開会の言葉に続いて図書館長の永塚三郎先生の挨拶です。保善高校では、図書部の主任の先生は図書館長と呼ばれています。

人見先生のお話は40才を過ぎて始めた山歩きのことです。始めたきっかけ、今までの経験、自分の生活にとって山歩きが持っている意味を語られ、山の本の紹介と図書館には人類の英知が保存されているという話につながります。

ここで休憩。登山部の生徒が山でいれるのと同じ方法で入れたコーヒーを配ります。司書の坂口

とし子さんが関連する本を紹介します。

戸嶋先生のお話は、高校や大学で登山部に籍をおいたわけではないが中学生時代から登り始めて20数年、高い山では雷が頭の上でなるのではなく、横からやってくる話、失敗した話、人見先生に山登りの手ほどきをしたことなどです。自分で能動的に動いて楽しさを経験する登山は25000冊の図書館の蔵書の中から本を選んで間接体験を楽しむのと似ている点がある、生徒諸君も受け身の楽しみだけに終わらないようにということで終り。

お二人の先生のお話が終ると、図書委員長の司会で、懇談会が始まります。発言を求められた一年生が戸嶋先生のお話はよくまとまっていて分かりやすかったとの感想をのべて笑いを誘います。

二回目、12月定期考査の終わった日。階下の賑いは前回同様。樋山先生は、新宿、高田馬場、戸山町などの地名の由来や学校周辺にある史跡などについて語られ、図書委員がお茶やお菓子を配って懇談に入りました。この回は、講座が違って小休憩があつてから学校周辺の史跡巡りの散策に出たそうです。

どちらもなかなか興味深い講座でした。

それは、三人の先生方が教師という立場をちょっと脇に置いて、生徒よりも20数年長く生きてきた者として、自分の姿を素直にその場の皆に見せているからではないでしょうか。同じ様な内容の話をして、担任としてクラスに話すときや顧問として登山部や文学散歩同好会で話すときは違う意味合いを持つでしょう。また、同じ内容の話を学外から招いた講師が語ったのでは、全く違うことになるでしょう。声を聞くのも、もしかしたら名前と顔が一致するのも今日が初めてかもしれないけど、自分の通っている学校の先生が話してくれるから、親しく聞けるのでしょう。先生にとっては勤務し、生徒にとっては在学している保善高校という共通の場がこの講座をいきたものにしていくのです。学内の人を結ぶこういう企画がたえられるのは図書館をおいて他にないようです。

# いよいよ貸出

私のコンピューター導入奮戦記④

木下通子

## 地獄の春休み—1994年3月

1992年の秋から始まったこの連載も早四回めです。二度めの春がめぐってきてしまいました…。そしてこの春休み、私はデータ入力に追われています。

前回お話したように、導入したパソコンは1993年度からCD-ROMなどの検索サービスに使えるようになりました。パソコンを導入してから2年半。いくらCD-ROMは使えるようになって、パソコンで貸出をしないと校内でコンピュータを導入したという評価は、なかなか得られないのです。実際に作業をする私にとっては、「通常の業務をしながら、2年で遡及入力を終らせて、データ入力完成なんて!」と叫びたい気分ですが、作業の味がわからない先生方からは「まだ、貸出できないの?」と聞かれます。せっかく高いお金を出してパソコンを入れたのだからと思っているのでしょう。そういう意味でも、作業をする司書と他のみなさんのコンピュータ導入の感覚には、かなりのギャップがありました。

そんな中で図書部の先生方はとっても理解がありました。私が通常どんな仕事をしていて、図書館がどんなふう利用されているか知っているので、遡及入力についても「普通の業務をしながらじゃ無理だよ」とわかってくれていました。が、せっかくパソコンがあるのだから貸出にも使いたいという意見がとうぜんあって、そのためにどうすればいいか何回か話し合いました。

その結果、先生方はデータ入力は手伝えないけれど（なぜならデータの確認をしていかなくてはいけないから、司書がしなくてはいけないと私が言ったから）、それ以外の司書の仕事をみんなで助けようと考えてくれて、1993年度の二学期から当番制でブッカーをかけたり、カードを整理したりする仕事を積極的にやってくれるようになりました。

学校からはデータを買うお金は出してもらえません。その上に、図書部の先生方も積極的に協力してくれています。そんな中で、パソコンは貸出

をするために入れたんじゃないで、蔵書を把握して検索できるようにするために入れたんだ! だから、データをきちんと統一された形で入力できるまでは貸出は考えないぞ! と内心決めていた私も、「パソコンが活用されていることを学校内で認めてもらうためには、貸出をしなくちゃ…」と思うようになりました。

## まず、広報で使ってみよう—1991年

コンピュータが入った次の年、1991年から新刊の入力を始めました。ちょうどこの年は、落ち込んでいた図書館利用を伸ばしたいと切実に考えていた時期で、利用者に図書館の情報を知ってもらうため、そして、パソコン導入の利点を最大に生かすために週一回を目標に「らいぶらりい いんふおめーしょん」という広報紙を出すことにしました。

B4両面刷りと量的にも高い目標をたててしまった結果、新刊情報はかなりメインの記事になります。図書館に入った本を、必ず全部掲載するという目標を達成するのは、パソコンがなければ到底無理でした。

この頃はまだ、ワープロで打った原稿に「LIBROS」で打ちだした新刊リストを貼るという原始的な方法をとってニュースを作っていたのですが、その作業が増えたことに伴って、他の作業を減らそうと今までの本の受け入れの手順も少し変えました。まず、バーコードに学校名も入っているのだからと、蔵書印等のはんこを全部やめました。データが完全に入力できるまでは基本カードとブックカードを一枚ずつ作りますが、本にバーコードを貼り、「LIBROS」にデータを入力し、ラベルを貼ってブッカーをかけて整理はおしまい。データ入力を先にしていないと新刊案内も載せられないので、新刊の入力漏れはなくなりました。本の整理の手間を省いた分、遡及入力もできるぞ! という甘い考えも持っていました。

ところが、それまでほとんど自分の手で広報紙を出していなかった私には、ニュースを出すのも

一苦勞。新刊の手入力もまだまだ遅くて、とても  
選及入力にまで手が回りません。毎週1回の目標  
が月に2回になることはあっても、ニュースはな  
んとか続けて発行することができましたが、この  
年は「LIBROS」を使い慣れることで終わってしま  
いました。

### 貸出を始めよう—1992年3月

バーコードの話を書いた最初の号が、「まさか  
2年後にもう一度バーコードを貼る事になろうと  
は…」という終り方をしたのを覚えていますか？

1992年4月から、とりあえず図書館にあるコ  
ミックをパソコンで貸出してみようと考えていま  
した。本のデータは全部入っていませんが、コ  
ミックはそんなに数が多くないので、データを入  
れるのもたいへんじゃないし、貸出の練習をする  
には最適だと思ったからです。「LIBROS」には貸  
出システムがないので、「LIBROS」を導入した当  
初から、貸出には他校で開発した「LIBROS」の  
データをそのまま生かせる「かすぞう君」という  
ソフトを使わせてもらうつもりでいました。

利用者が持つIDカードはバーコードを頼んだ会  
社に発注しました。デザインは葉っぱの絵を生か  
して考えました。そして2月には「かすぞう君」  
を覚えるためや、契約書を取り交わしたりするた  
めに何回か相手の学校におじゃましました。「か  
すぞう君」にはマニュアルがなかったので、使い  
方がわかるかという不安もあったのですが、後は  
やりながら覚えればいよと気軽に考えていまし  
た。コミックのデータ入力はもうばっちりです。  
図書館の先生とわくわくしながら、「かすぞう  
君」に利用者データとコミックのデータを落とし  
込みました。

3月も中旬に入り、さあ使ってみようとバー  
コードリーダーを持ち、私のIDカードをピッ！ と  
なぞると、出た出た、まず私の名前の貸出画面が  
出てきます。そして、いざ本のバーコードを  
ピッ！ とところが何回やってもデータが入らない  
のです。なぜデータが入らないのか、私たちには  
わかりません。あわてて相手の学校に連絡。何回

かやりとりをしている内に、原因はバーコードの  
桁数に関係があることがわかったのです。

### そして、バーコード貼り直しのこと

その学校で使っているバーコードは6桁。うち  
の学校が貼ったのが7桁。最初はなんとか桁数を  
増やしてプログラムを組み直せないか、みんなが  
努力してくれたのですが、「かすぞう君」の基本  
設計の段階で、バーコードの桁数を6桁と指定し  
てプログラムを組んでいたもので、到底短時間で  
プログラムをいじってもらえるわけもなく、もち  
ろん私にはそんな技術もなく、バーコードを貼り  
変えなくては先に進めないという事実が、私の目  
の前に迫ってきました。

その時は、2年前のたいへんさが蘇って来て、  
みんなにどうしたのと声をかけられるほど、落ち  
込んでしまいました。急いで対応しなくちゃと、  
図書館の先生に緊急に集まってもらって事情を説  
明する時にも、思わず涙がぼろぼろ。バーコード  
屋さんにも無理な発注をする時にも、説明してい  
てぼろぼろ。ふだん気が強くて絶対に泣かないタイ  
プの私が気弱になっているのを見て図書館の先生  
も、お金を出してくれる事務室も（もう一回バー  
コードを注文しました）みんなが協力してくれま  
した。

それからは大騒ぎ。蔵書点検をする予定だった  
日にちをバーコード貼りに変更し、教師も生徒も  
一丸となって、バーコードを貼り直しました。最  
初にバーコードを貼った時、分類番号順に貼った  
のが幸いし、貼り直しも本を探す苦勞が少なく  
て、なんとか3月いっぱい貼り直し作業を終る  
ことができました。

さて、バーコードは貼り直せたとと言っても、  
1992年4月からコミックをパソコンで貸出するの  
はちょっと無理でした。コミックを貸出できるよ  
うに項目を増やしてもらったり、貸出冊数制限を  
増やしてもらったり（本当は無制限にしたかつた）、  
「かすぞう君」を岩槻商業バージョンに直して  
もらったところがあって、その部分がスムーズ  
に動かなかったのです。私もバーコード貼り直

しの教訓を生かして無理をせず、じっくり取り組むことにしました。

でも、広報は充実した—1992年3月

1992年も「いんぷおめーしょん」の発行は続けていました。ひよんなことから、「LIBROS」のデータをワープロソフト—太郎に落とす技を発見し、それからは切り貼りもしないですむようになりました。データ入力や広報紙作りもずいぶん慣れてきて、この年はなんとか週に1回ペースで「いんぷおめーしょん」を発行できました。秋になって生徒からの要望と、読書月間の企画をきっかけに“司書の選んだこの一冊”という書評欄を作りました。その号に掲載した中から一冊の本を取り上げて紹介してみようと思ったからです。下降線だった図書館利用も少しずつ伸び始め、1992年は年間の貸出冊数が前年度に比べて2500冊ほど増えました。最初は“紙のムダ”と言われていた「いんぷおめーしょん」も、発行を続けていくうちにだんだん定着してきました。発行しているこちらにも作るのに慣れてきて、少しずつ手際も良くなり、週に1回というペースもきつなくなりました。本に対する生徒の反応も敏感になってきて、「いんぷおめーしょん」が出ると「この本ある？」と飛び込んでくる生徒が増えました。年度末にとった利用者アンケートで

も読んでいると答えた生徒が回答者の6割を越え、ぐっとやる気になりました。

生徒の利用が活発になるのに伴って、教師の図書館利用も徐々に増えてきました。簡単な資料相談から、授業へのサービスまで、一つ一つに丁寧に対応したいと思っていると、遡及入力に力を注ぐ時間が見つかりません。昨年までとうてかわったあわただしい毎日を過ごしているうちに、遡及入力がちっとも進まないまま1992年度も終ってしまいました。

さて、この時点で遡及入力が終わっていないので、1993年度から普通の本の貸出はできません。トホホ…。1993年度はせめてコミックの貸出をと再度チャレンジしました。変な部分は直してもらっていたので、再びドキドキしながら「かずぞう君」をピツ！ できた！ 今度はきちんとデータをよんでくれました。これでせめてコミックだけでも貸出が始められます。

が、喜んでばかりはいられません。コミックだけパソコンで貸出をして、普通の本は手作業で貸出をするのですから、カウンターで混雑が起こるのは必須です。貸出も徐々に伸びてきていたのでもうまく人の流れをさばけるか、不安を感じながらも1993年度に突入しました。

(きのした みちこ:埼玉県立岩槻商業高校図書館)

# 図書館のみなさんへ

岩波書店では、図書館のみなさんのご意見・ご要望を直接にお聞きしたいと考えております。

**03-5210-4113**

FAX 03-5210-4117

岩波書店 営業部図書館係・加藤

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

●国際化時代を生きる高校生の自己教育を育てる「課題学習」に最適!

## 江戸時代 人づくり風土記

●全50巻 ●既刊28巻27冊 ……揃価126,000円  
●特選5巻セット ……揃価19,000円

<既刊セット内容>

③岩手⑭神奈川⑳長野㉔京都④〇福岡 ……各3,800円  
(特選5巻セット19,000円)  
①北海道②青森⑤秋田⑥山形⑦福島⑧茨城⑨栃木⑫千葉⑮新潟  
⑯富山⑰石川⑱福井⑲岐阜㉒静岡㉔三重㉖岡山㉘広島㉚高知  
④②長崎④③熊本 ……各4,500円  
⑬④⑧ (東京版)大江戸万華鏡(CD「大江戸四季の音巡り」付き)  
……………10,000円  
④⑦沖繩 (CD「沖繩を聞こう」付き)……………7,000円

続刊 ④宮城 94年5月下旬刊 発刊記念特価 4,500円

〒107 東京都港区赤坂7-6-1 農文協 ☎03(3585)1141 FAX03(3589)1387

# 幕末

## 写真の時代

小沢健志[編]

挑むようなまなざしの肖像、宿場町のにぎわい、軒を並べる露店、衝撃的な事件の現場……。日本がもっとも活気に満ちた時代・幕末を再現する貴重な写真300点。 定価9800円(税込)

紙  
で  
で  
て  
き  
た  
タ  
イ  
ム  
マ  
シ  
ン

**筑摩書房** 〒111東京都台東区蔵前2-6-4  
☎048(651)0053(サービスセンター)

### 1994年新学期 特選スポーツ医学・科学選書

- スポーツ相談O&A  
四六判 定価1200円(税込)
- スポーツ相談O&A  
四六判 定価1200円(税込)
- スポーツ外傷と障害  
四六判 定価1200円(税込)
- 知っておきたい  
スポーツ救急医学  
A5判 定価1800円(税込)
- 知っておきたい  
スポーツ傷害の医学  
A5判 定価1800円(税込)
- エアロビック  
B5判変型 定価1800円(税込)
- エクササイズ・ガイド  
B5判変型 定価1800円(税込)

体育・スポーツ総合出版  
株式会社ベースボール・マガジン社

〒101東京都千代田区三崎町3-10-10 ☎03(3238)0181 ●FAX03(3238)0084

## ヤングアダルト図書総目録



ヤングアダルトとは、ティーンエイジャーの年頃をさす「若い大人」という意味です。ヤングアダルトを対象としたあらゆる分野の本を収録した'94年版図書目録。 頒価300円

### ヤングアダルト図書目録刊行会

〒162 東京都新宿区東五軒町6-24トール内 電話(03)3266-9587(代表)

## サン=テグジュペリ 海に消えて50年……

### 永遠の星の王子さま

われわれがみな同じ遊星の住民であり、一つの船に乗り合わせた乗客なのだという事を、心の底から人びとに伝えなかったからなのです。

サン=テグジュペリの没後50年記念の国際共同企画。1944年サルジニア島でのサン=テグジュペリを撮ったJ. フィリップスの写真と、E. プチ、リンドバーグ夫人たちの彼に献げたすてきな文章もあつめて。[A5変型 96頁 2884円]

サン=テグジュペリ著作集 全11巻別巻1 揃価42024円

東京文京本郷3 **みすず書房** ☎03(3814)0131

### ミネルヴァ書房

## 図表でみる女の現在

フォーラム女性の生活と展望編 現代の女性に関する最新のデータを空前の図表数で描き出す。 2800円

## たのしく読める イギリス文学

中村邦生/木下卓/大神田文二編著・作品ガイド150 歴史的・文化的背景から新たな味わいを発見。 2800円

## たのしく読める アメリカ文学

高田賢一/野田研一/笹田直人編著・作品ガイド150 あらすじ、作品の読み方、作家履歴、読書案内他。 2800円

〒607 京都市山科区日ノ岡 ☎075(581)0296 価格は税込です。

### ● シリーズ冒険の世界史 ●

## パナマ地峡秘史

デイヴィッド・ハワース=著/塩野崎宏=訳/夢と残虐の400年/甘い腐臭漂う密林をひらき2つの大海に運河が通る。巨富と覇権を巡り昔も今も血を流し続ける人々。21世紀にさらに火種を残すパナマ地峡。 /2900円

## 海賊の世界史

フィリップ・ゴス=著/朝比奈一郎=訳/1932年公刊の有名な古典の本邦初訳。17~20世紀の世界各地…トルコ、北米、南米、日本、アフリカ…。全ゆる海の男達の栄光と悲惨の歴史がこの一冊に。 /2700円

### リポート

価格は税別●図書目録送呈  
〒171東京都豊島区南池袋2-23-2池袋パークサイドビル2F  
tel.03(3983)6191 fax.03(3983)6193